

神戸グローバルチャレンジプログラム
平成27～28年度自己点検・評価報告書

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構
神戸グローバルチャレンジプログラム委員会

平成29年1月

目次

1. 神戸大学グローバルチャレンジプログラム概要	3
1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム.....	3
1-1-1. クォーター制の導入.....	3
1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革.....	3
1-2. 事業の目標と取組計画.....	4
1-2-1. 事業概要と成果指標.....	4
1-2-2. 事業年度（5年）を通じた取組計画概要.....	5
(1) プログラム内容の開発及び実施.....	5
(2) 学修の実施と成果の把握・指標.....	5
(3) 学生等への周知や広報、FD・SDの実施、他大学への情報提供.....	6
(4) プログラムの活動資金の確保.....	6
(5) 学生の主体的な活動企画.....	7
1-2-3. 実施体制.....	7
(1) 主な学内体制.....	7
(2) 学外との協力.....	8
2. 平成27年度及び28年度の取組	9
2-1. プログラムの実施と自己評価.....	9
2-1-1. プログラムの運営.....	9
(1) コーディネーターの雇用.....	9
(2) 委員会の設置・実施.....	9
2-1-2. 参加学生の学修成果の向上と把握.....	11
(1) チャレンジシート、リフレクションシートの作成.....	11
(2) 全体報告会の実施.....	11
(3) 危機管理学修の実施.....	12
(4) 英語力向上セミナーの実施.....	12
(5) ルーブリックの作成と学生による自己評価.....	12
2-1-3. 学生等への広報・波及活動.....	13
(1) ウェブサイトの設置、パンフレット、学生募集の説明会等.....	13
(2) キックオフセミナーの実施.....	14
(3) ホームカミングデイ、大学祭での発表.....	14
2-1-4. 教職員の能力向上.....	15
(1) FD・SDの実施.....	15

2-1-5. 学生への経済支援	15
2-2. 各コースの実施と自己評価	16
(1) ハンブルク異文化理解コース (ハンブルクコース)	16
(2) カナダ・トロントの多文化社会研究 (トロント大学コース)	17
(3) アジア・フィールドワークコース	19
(4) Lawyering in Asia コース	20
(5) 国際産官学連携スタートアップコース (国際連携スタートアップコース)	21
(6) 国際産官学連携アドバンストコース (国際連携アドバンストコース)	22
(7) UPLB 農学英語コース (UPLB コース)	23
(8) EU フィールドワークコース (KUPES コース)	24
(9) グローバルチャレンジコース (学生企画型)	25
(10) インターンシップチャレンジコース (インターンシップコース)	26
(11) フィールドワークチャレンジコース (フィールドワークコース)	28
(12) ボランティアチャレンジコース (ボランティアコース)	29
(13) ニューヨークのアートとフィールドワークコース (ニューヨークコース)	30
(14) ギャップターム海外協定派遣コース	31
(15) 理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース (理学 UPLB コース)	32
(16) 理学グローバルチャレンジ Tsinghua/Life コース (理学 Tsinghua)	32
(17) 理学グローバルチャレンジ Nangyang/Sci コース (理学 Nangyang)	32
3. プログラム全体の自己評価 ―成果と課題―	33
3-1. プログラム目標能力に関する自己評価	33
3-2. プログラム参加後のアンケート結果と分析	34
3-3. プログラム全体の自己評価総括	38
(1) 自己評価総括	38
(2) 今後の課題	38

1. 神戸大学グローバルチャレンジプログラム概要

1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム

神戸大学はこれまで、人文社会科学系学部を中心とする「経済社会を牽引するグローバル人材育成支援」プログラムを始め、各学部でグローバル人材育成のために留学を組み込んだ様々な取組を行ってきた。これらの取組を促進すると共に、対象を全学生へと拡大するため、本学では、学士課程の学生を「自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる人材」（「課題発見・解決型グローバル人材」）に育成することを目標に、平成 28 年 4 月から、以下のとおり教育改革を実施している。神戸グローバルチャレンジプログラム（以下「神戸 GCP」という。）は本学の教育改革を活用し、その効果を大きく高めるプログラムである。

1-1-1. クォーター制の導入

これまでの前期・後期の授業期間をそれぞれ分割し、各 8 週で授業を行うクォーター制を導入した。これにより、週 1 回または週 2 回 8 週の授業による集中的な学修を可能とするとともに、特定のクォーターをギャップタームとして利用することが可能となった。また、学生はギャップタームを活用することにより、海外短期留学、海外のサマースクール、海外インターンシップ、ボランティア等の様々な学外学修において多様な経験をし、4 年間で卒業することが可能となった。

神戸 GCP においては、このクォーター制により生じるギャップタームを利用し、学生が 1・2 年次に国際的なフィールドで行うインターンシップなどの学外学修を促進する。



1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革

神戸大学では、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき以下の能力を新たに「神戸スタンダード」として定め、神戸スタンダードの修得を教養教育の学修目標とした。

- 複眼的に思考する能力：専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものを見方を身につける
- 多様性と地球的課題を理解する能力：多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける
- 協働して実践する能力：専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

また、「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるよう、主として 1・2 年生が学修していた教養科目を見直し、平成 28 年 4 月から「基礎教養科目」及び「総合教養科目」に再編した。さらに、平成 29 年度より、高学年の学部生を対象とする新たな科目として、「高度教養科目」を設け、4 年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供することを予定している。「神戸スタンダード」の各能力と各教養科目は、以下のように対応している。

- ・「複眼的に思考する能力」：「基礎教養科目」において身につける目標

・「多様性と地球的課題を理解する能力」：「総合教養科目」において身につける目標

・「協働して実践する能力」：「高度教養科目」において身につける目標

神戸 GCP では、学生の学外活動による学修に、事前学修・事後学修を組み合わせることで学修成果を高め、「総合教養科目」の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与を行う。このことにより、神戸 GCP は体系的な教養教育のカリキュラム内に位置づけられると共に、全学生の受講が可能となっている。

1-2. 事業の目標と取組計画

1-2-1. 事業概要と成果指標

神戸 GCP は、学部 1・2 年生の 1 つのクォーターをギャップタームとして設定し、国際的なフィールドで学生が行う自主的な活動を、「グローバルチャレンジ実習」として単位授与するプログラムである。その目的は、参加学生が低年次において自らの体験に基づき「神戸スタンダード」の必要性を体感し、「学びとは何か」を主体的に考え、「学びの動機づけ」を得ることである。学生は国際的なフィールドでの活動や異文化環境下での体験に基づき、外国語でのコミュニケーション能力を高めると共に、「課題発見・解決能力」の必要性を体感することができる。このことにより、課題解決に向けた意欲を高め、学生自らが学修目標・計画を立てて活動に取り組み、主体的な学修姿勢を大学入学後の早い時期から身につけることが期待される。また、学生は本プログラムに参加し、主体的に活動することを通じて、本学が独自に設定した「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を身につけることができる。

【独自指標】

I) プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」(ループリックによる測定)

H29 水準2に達した学生 50%、水準3に達した学生 10%

H31 水準2に達した学生 75%、水準3に達した学生 30%

II) プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

H29 20.0%(29/145)、H31 50.0%(250/500)

【必須指標】

i) 長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数 / 全学生数)]

H29 1.77%(210/11,849)、H31 2.53%(300/11,849)

長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数 / 1、2 年生の学生数)]

H29 3.97%(210/5,294)、H31 5.67%(300/5,294)

ii) 上記プログラムを経た学生の成績評価[プログラムに参加した学生と不参加学生の GPA の平均の差]

H29 0.27、H31 0.41

iii) 退学率 [% (退学者 (除籍者を含む) / 在籍者数)]

H29 1.03%(122/11,849)、H31 0.98%(116/11,849)

iv) 学生の授業外学修時間 [時間数 (1 週間当たり (時間) 教務情報システムを利用し、半期毎に全学生にアンケートを行って把握]

全学生: H29 6 時間、H31 6.5 時間

プログラム参加学生: H29 8 時間、H31 12 時間

v) 進路決定の割合 [% ((就職決定者数 + 進学者数) / 卒業者数)]

H29 92.51%(2,458/2,657)、H31 94.09%(2,500/2,657)

VI) 学生が企画する活動数(活動数)(大学関与分のみ)

H29 100 件、H31 150 件

1-2-2. 事業年度(5年)を通じての取組計画概要

神戸 GCP の実施に当たっての取組計画は、以下のとおりである。

(1) プログラム内容の開発及び実施

神戸 GCP として実施する取組は、各担当教員が現地視察及び受入先との協議等により開発を進め、同プログラム委員会(以下、「委員会」という。)において認定する。認定基準は、本プログラムで身に付けることが期待される3つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」に基づくものとする。

1・2年生に同プログラムに参加することで学修への動機づけを行い、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を学生が修得することをねらいとする。

プログラムに参加する全ての学生には、学修目標を定め、企画書・計画書を作成することを求める。学生は、グローバルチャレンジプログラムコーディネーター(以下、コーディネーター)またはアドバイザー教員の指導の下、事前・渡航中・事後の学修を行い、学修成果をまとめる。学生がまとめた学修成果は、コーディネーターまたはアドバイザー教員が委員会に報告し、「総合教養科目」の中に位置付けられる「グローバルチャレンジ実習」として単位授与(1～2単位)を行う。

具体的には、以下のようなコースを設ける。(参加人数は平成28年度実施予定)

・グローバルインターンシップ・フィールドワーク

(1・2年生30～45名、第2Q・5～7週間) 学生の企画による海外インターンシップやフィールドワークを実施する。その際、コーディネーターがキャリアセンターや留学生センターの海外同窓ネットワーク等との調整を行う。学生は、自ら学修目標を定め、企画書を作成して応募する。その際、学生自ら依頼したアドバイザー教員1名を付ける。企画の中から、委員会が優れたものを採択し、コーディネーターが受入れ国と調整して学生自身が計画・実行する。

・課題研究フィールドワーク(1年生10名、第2Q～夏休み・5週間)

グローバル社会の課題(開発と環境、防災・減災、貧困問題等)解決に向けて必要となる資質・能力はどのようなものかを実践の中で自覚することを目指す。5名程度を1グループとし、文系・理系など学生の多様性を考慮して構成したグループごとに訪問先、課題を設定してフィールドワークを行う。

・スタートアップ国内インターンシップ(1年生15名、第2Q～夏休み・7週間)

政府機関、国際機関、日本に進出している海外企業・世界で事業展開をしている日本企業等への国内短期インターンシップを行う。

・EUフィールドワーク(2年生50名、第2Q～夏休み・5週間)

フランス、ベルギー、ドイツ、イタリア等のいずれかまたは複数の国において、国際関係、文化政策、日欧比較、海外における日本文化、法律、経済等の重点テーマにそって、各自のテーマに基づいたフィールドワークを行う。また、協定校での合同ゼミ、国際シンポ等への参加・発表を行う。

・アドバンスト国外サマースクール・インターンシップ(2年生10～20名、第2Q～夏休み・6～8週間)

海外協定校でのサマースクールならびにインターンシップを中心とした学外研修を行う。

(2) 学修の実施と成果の把握・指標

・事前学修・事後学修

学外活動学修の前後に、事前・事後学修を実施する。学生は事前学修時に企画書・計画書(チャレンジ

シート)を作成するほか、安全管理についてのオリエンテーション・講習会の受講を義務化し、海外等学外へ出る際の心構え、安全管理について学修する。在外学修に参加する学生には、保険加入を義務付けるとともに、「留学生危機管理システム」の登録を義務付ける。また、事後学修時に学修の振り返りを行い、報告書(リフレクションシート)を提出する。主体的な学修を身に付けさせるため、アクティブ・ラーニングを取り入れた学修を行う。学外学修で得た経験を基にグローバル人材に必要な能力や自らの能力・可能性に対する「気づき」を有し、今後の学修へのモチベーションを高める動機づけにつなげる。

・合同報告会

プログラム参加者主催による合同報告会を開催する。学生同士がネットワークを構築し、刺激し合うことでモチベーションの維持を図り、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を付けさせる。

・学修ポートフォリオの利用

神戸大学学修支援システム BEEF を本プログラムの学修ポートフォリオとして活用する。チャレンジシートの提出・保存、事前学修として安全管理マニュアル等の配付、SNS 機能による海外等滞在中の指導、事後学修時のリフレクションシートの提出に BEEF を活用し、参加学生の学修状況・学修時間・学修成果の把握と保管を行う。

・英語外部試験の活用

全学部生が入学直後に英語外部試験を受験し、その結果を本プログラム対象者の選抜に利用する。点数の低い学生は必要なスコアを修得するまで事前学修を行う。プログラム実施後には再び英語外部試験を受験し、プログラム実施前からの英語力の伸びを測定し、語学力向上に向けた学修に活用する。

・学修成果の評価指標

学生の質的な成長について、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を神戸 GCP 独自の指標とし、ループリックを作成の上、評価する。事前学修・海外活動・事後学修・事後活動などの実績(学修ポートフォリオ)と報告会(プレゼンテーションと質疑応答)を基に、多面的な評価を行う。

(3) 学生等への周知や広報、FD・SDの実施、他大学への情報提供

本プログラムのウェブサイトを作成し、学生への周知や広報を行う。また、プログラムの成果を可視化してウェブサイト等で公表する。

また、派遣先での安全管理や異文化理解等、国際的なフィールドでの活動に関する知識や方法について十分な知識が必要となるため、教職員に対して海外研修や計画的な FD・SD を実施し、学生の国際的なフィールドでの学外学修を的確にサポートできる人材養成を行う。

他大学等への情報提供を行って取組の波及を図り、平成 31 年度には報告書を作成して公表する。

(4) プログラムの活動資金の確保

プログラムの活動において、渡航費等は学生が自ら負担することが原則であるが、より多くの学生が参加できるよう、以下のとおり資金を確保する。教育上サポートが必要な場合や、教育的効果が高いと判断できる取組に対し、資金の一部補助を行う。

- ・神戸大学基金
- ・全学及び各学部後援会・同窓会からの援助
- ・日本学生支援機構等の各種奨学金

(5) 学生の主体的な活動企画

本プログラムに参加した学生は、海外等のフィールドの中で活動を行った経験に基づき、問題意識を高め、課題解決に向けた意欲を高めることが期待できる。また、合同報告会等による成果報告、アクティブ・ラーニングの拡大及びラーニングコモンズ整備によりプログラム不参加学生への波及効果を期待される。これらの取組により、学修意欲の高い学生による自主ゼミやセミナー、海外フィールドワーク等の多様な主体的活動の増加が期待される。

・平成 27 年度実施計画

- ①グローバルチャレンジプログラム委員会を設置する。
- ②グローバルチャレンジプログラム担当のコーディネーター及び派遣職員等を雇用する。
- ③プログラムのコースを構築し、グローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。
- ④プログラムとして認定したコースに参加する学生を募集し、講習会を実施する。
- ⑤プログラムに係るウェブサイトを開設する。
- ⑥プログラム及びコースパンフレットを作成し、学内外へ配布する。
- ⑦キックオフセミナーを開催する。
- ⑧プログラム実施に係る TA を雇用し、TA 研修を実施する。
- ⑨教職員への FD・SD を実施する。
- ⑩学生受け入れ先の開拓・調査を行う。
- ⑪外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。
- ⑫本事業の自己評価の体制を検討、整備する。
- ⑬プログラムの教育成果を測定するため、教務システムの改修及びループリックを作成する。

・平成 28 年度実施計画

- ①プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。
- ②クォーター制を全学的に導入する。
- ③国際教養教育院において基礎教養科目、総合教養科目を開講する。
- ④初年次セミナーを全学部で開講する。
- ⑤プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。
- ⑥神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。
- ⑦プログラムのコースを実施する。
- ⑧プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。
- ⑨学生受け入れ先の開拓・調査を行い、派遣先の拡充を図る。
- ⑩教職員への FD・SD を実施する。
- ⑪外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。
- ⑫全学部 1 年次生を対象に英語外部試験を実施する。
- ⑬プログラム参加学生による全体報告会を実施する。
- ⑭ループリックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。
- ⑮次年度から開始するコースを神戸グローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。
- ⑯事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において行う。
- ⑰パンフレットを作成し、学生及び学外関係者に配付する。
- ⑱事業の自己点検・評価を全学評価・FD 委員会、大学教育推進委員会において行う。
- ⑲学外の有識者による事業の外部評価を実施する。

1-2-3. 実施体制

(1) 主な学内体制

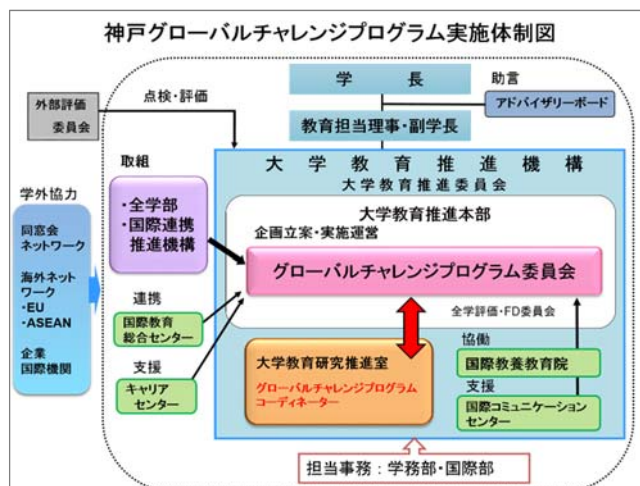
大学教育推進本部内に新たに「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会（以下、「プログラム委員

会」という。))」を設置する。プログラム委員会は、大学教育研究推進室及び国際教養教育院と協働し、本事業の企画・立案、運営及び実施について全学的な意思決定を行う。具体的には、各コースの審査・認定・予算配分及びプログラムの運営についての意思決定を行うとともに、自己点検・評価を行う。

グローバルチャレンジプログラムコーディネーター（以下、「コーディネーター」という。）を「大学教育研究推進室」に配置し、コースの企画・立案や受入先との交渉、調整を行う。また、事前・事後学修及び国際フィールドでの学外学修プログラムに関する教職員研修等を担当する。

（２）学外との協力

国籍や専門を超えた本学の「海外同窓会ネットワーク（13 拠点：東アジア・東南、中央アジア・欧州）」等を活用してプログラムの更なる展開を行う。特に、海外同窓会ネットワークを統括している国際教育総合センター（旧留学生センター）と密接な連携の下、派遣国を開拓し、プログラムの更なる展開を図っていく。また、国際機関やグローバルに事業を展開する企業と本学とのネットワークを最大限に活用し、連携して多様なコースを開発・実施する。



・神戸グローバルチャレンジプログラム事業



2. 平成27年度及び28年度の取組

平成27年～28年にかけて、本プログラムでは以下のとおり取組を行った。また、自己評価においては、取組計画に対し5段階（「1：実施できなかった」「2：計画通り十分に実施できなかった」「3：計画通り実施できた」「4：計画を十分実施できた」「5：計画を大幅に超えて実施できた」）で評価を行った。

2-1. プログラムの実施と自己評価

2-1-1. プログラムの運営

（1）コーディネーターの雇用

平成27年12月に、大学教育推進機構大学教育研究推進室において、海外研修プログラムのコーディネーター経験が豊富な実務者を神戸GCP担当のコーディネーターとして雇用し、コースの企画・立案、受入先との交渉・調整及び神戸GCP全体の運営を行った。

プログラム担当のコーディネーターが本事業の中心的な役割を担うことで、（1）新たなコースの企画・立案や受入先との交渉、調整を円滑に行うことが可能となり、学生の学外学修の機会を数多く提供することが可能となった。（2）危機管理学修や学外学修後の全体報告会を各コース共通して実施することが可能となり、学生の学外学修における安全性や成果を、神戸GCPとして高めることができた。（3）神戸GCPホームページの作成や学外での成果報告を通じて、神戸GCPの認知度を学内で高め、学生の学修意欲を向上させるとともに、学外にプログラムの効果を発信することが可能となった。

（2）委員会の設置・実施

平成27年10月に、大学教育推進機構大学教育推進本部の下に神戸GCP委員会を設置し、平成27年度は4回、平成28年度は平成29年1月までに6回開催した。委員会では、コースの実施に向けた制度の整備や、次年度実施コースの審査・認定、予算執行及びプログラムの運営についての意思決定を行った。委員会の設置及び実施により、本事業を円滑に実施することができると共に、各コース担当者とプログラム実施における改善点等について意思疎通を行うことができた。

以下に、平成27年度及び平成28年度に審議された事項を示す。（平成29年1月時点）

【平成27年度】

- ・第1回委員会（平成27年10月9日（金）開催）
 - 1. 委員長等の選任について
 - 2. 平成27年度「神戸グローバルチャレンジプログラム」予算配分について
 - 3. 「神戸グローバルチャレンジプログラム実施要綱」について
 - 4. 神戸グローバルチャレンジプログラムコースの申請について
 - 5. 神戸グローバルチャレンジプログラム実施スケジュールについて
- ・第2回委員会（平成27年11月13日（金）開催）
 - 1. 神戸グローバルチャレンジプログラムコースの申請及び認定について
 - 2. 「グローバルチャレンジ実習」の単位認定について
 - 3. キックオフセミナーの実施について
- ・第3回委員会（平成27年12月11日（金）開催）
 - 1. コースの申請及び認定について

- 2. キックオフセミナーの実施について
 - 3. 平成 28 年度の補助金配分方針について
 - 4. パンフレットの作成について
- ・第 4 回委員会（平成 28 年 1 月 15 日（金）開催）
 - 1. 「チャレンジシート」「リフレクションシート」等の作成について
 - 2. シラバスの作成について
 - 3. 平成 27 年度予算執行状況の確認について
- 【平成 28 年度】
- ・第 1 回委員会（平成 28 年 4 月 8 日（金）開催）
 - 1. 平成 28 年度予算配分について
 - 2. 「神戸グローバルチャレンジプログラム実施要綱」等の改訂について
 - 3. シラバス（英語版）の作成について
 - 4. 学修目標「3つの能力」の統一評価について
 - 5. 事前学修における危機管理学修プログラムの実施について
 - 6. 「神戸大学基金」による海外派遣学生への奨学金支給について
 - 7. 平成 27～28 年度自己評価の実施について
 - 8. 平成 29 年度実施コースの申請について
 - 9. 平成 28 年度実施スケジュールについて
 - ・第 2 回委員会（平成 28 年 6 月 10 日（金）開催）
 - 1. プログラム全体報告会の実施について
 - 2. 外部評価委員会の設置について
 - 3. 平成 27・28 年度実績報告及び自己評価の実施について
 - 4. 事前学修における危機管理学修について
 - 5. 学外学修実施中における緊急時の情報共有及び対応について
 - 6. 平成 29 年度実施コースの申請について
 - ・第 3 回委員会（平成 28 年 9 月 9 日（金）開催）
 - 1. 平成 29 年度実施コースの申請及び認定について
 - 2. 緊急時連絡体制について
 - 3. 神戸グローバルチャレンジプログラムにおける単位授与に関する内規の一部改正について
 - 4. 平成 28 年度予算執行状況の確認について
 - 5. プログラム全体報告会の実施について
 - 6. 平成 28 年度外部評価委員会委員の候補者について
 - ・第 4 回委員会（平成 28 年 10 月 14 日（金）開催）
 - 1. 平成 29 年度海外留学支援制度（協定派遣）への申請について
 - 2. 大学教育再生加速プログラム(AP)フォローアップ調査について
 - 3. アンケートの実施について
 - 4. 平成 29 年度パンフレットの作成について
 - ・第 5 回委員会（平成 28 年 12 月 9 日（金）開催）
 - 1. 平成 29 年度補助金配分方針について
 - 2. 学生の単位授与について
 - 3. 平成 28 年度外部評価委員会の実施について

4. 平成 27～28 年度実績報告書について
5. 平成 27～28 年度自己点検・評価報告書の作成について
6. 平成 28 年度グローバルチャレンジコース（学生企画型）申請書について

・第 6 回委員会（平成 29 年 1 月 13 日（金）開催）

1. 平成 29 年度実施コースの変更について
2. 平成 27～28 年度自己点検・評価について
3. 新入生向け全体説明会兼全体報告会の実施について
4. HP 上でのプログラムコース紹介について

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

計画通り、神戸 GCP 委員会を設置し、本事業の企画・立案、運営及び実施について全学的な意思決定を行う体制を整え、同委員会において、本プログラムの実施要綱を策定したほか、予算配分やコースの審査・認定等、本プログラムの運営に関わる事項について審議・決定を行った。また神戸 GCP コーディネーターを雇用し、新たなコースの企画・立案、受入先との交渉・調整に加え、危機管理学修や学外学修後の全体報告会等を実施した。

2-1-2. 参加学生の学修成果の向上と把握

（1）チャレンジシート、リフレクションシートの作成

本プログラムを実施するにあたり、全コース共通で取組む 2 つのシートを導入し、学生が神戸大学学修支援システム BEEF を通じて提出できるように整備した。

それらは、参加学生が学外活動学修の前に行われる事前学修中に記入するチャレンジシートと、学外学修後の事後学修の中で記述するリフレクションシートである。

前者は、学生のコース参加目的を明確にするため、現状把握と学外活動学修での目標を定め、それらを成果あるものとするための事前準備や学外活動学修先で重視する心がまえを意識化させるものであり、後者はそれらの達成度を振り返り、また本プログラムを通じて伸ばすことが期待される 3 つの共通目標能力について個々の事例を具体的に記述し、客観的に捉えさせ、そこからグローバル人材に必要な能力や自らの能力、可能性に対する気づきを得、今後の学修へのモチベーションを高める動機付けに繋げるのが狙いである。

今年度 8～9 月に実施された前期コースでも、コース担当教員は担当コースに参加する学生に渡航前、渡航後に各シートを提出させ、学外活動学修での成長の度合いや質を具体的に把握し、評価対象として活用した。

（2）全体報告会の実施

平成 28 年度においては 10 月第 4 週の 1 週間を『神戸グローバルチャレンジプログラム週間』と定め、今年度前期に実施された 9 コースの全体報告会を実施し、うち 7 コースの参加学生の代表が活動や学修成果を、パワーポイントを使って報告発表した。全体報告会には、主として本プログラム参加学生が参加し、各発表後に行われる質疑応答での意見交換や他コースの報告を共有することで学修上の刺激を受けることができた。

報告発表と並行し、前述の一週間、学内の開放スペースにて、写真を交え学外活動学修の様態や活動成果を報告するパネル展を開催し、本プログラムのコース活動状況を学内に広く発信した。

パネル展示物や報告発表の準備は、学外活動学修を振り返り、そこでの気づきや学びを自覚し、今後の学修の方向性を定着させるために高い効果を収めた。

加えて、これらの運営は全てコース参加学生が主体となって進め、共通の学修目標のもとそれぞれの活動に取り組んできた学生たちが運営作業を協同することで、コースを越えて学生間に連帯の意識が芽生え、今後、本プログラムを推進する上で、事前学修、広報活動、フォローアップ等の様々な機会に貢献が期待できるものとなった。

(3) 危機管理学修の実施

前期に実施されたコースのうち、国外で学外活動学修に取り組む学生を対象に海外渡航の危機管理に関する授業を1コマ、出発の1ヶ月～1ヶ月半先に控えた平成28年7月に実施した。授業はコース別で行い、本プログラム海外渡航学生全員受講した。

授業は3つのテーマ（「海外安全対策の基本的な考え方」「異なるもの、異なる感覚、価値観、考え方との付き合い方」「こころとからだの管理」）から構成され、それぞれのテーマについての事例を取上げ、何が問題なのか、どのように行動をするのがよいのかをグループで論議したり、個別で考察しながら進められた。限られた時間でこれらについて詳細に渡って扱うことはできないため、それぞれのテーマで数例を取組んだ後、残りは神戸大学学修支援システム BEEF に掲載した資料で自主学修とした。

また、授業ではコースの渡航先の海外安全情報も資料として配布し、安全管理の意識喚起に努めた。

3テーマについて一方向で講授するのではなく、それぞれの事例について渡航者自身が考え、インタラクティブに授業を進めることで、また、コース毎に少人数で危機管理学修を行うことで、参加学生の海外渡航時の心構え、安全管理意識を徹底する授業となった。

並行して、本プログラムで海外渡航をする学生は全員、日本エマージェンシーアシスタンス株式会社が提供する海外危機管理サービス“OSSMA(Overseas Students Safety Management Assistance)”に加入するため、同社が実施する危機管理オリエンテーションも受講し、海外に学外活動学修に出る際の心構えを強化した。

(4) 英語力向上セミナーの実施

平成27年度は3月に、また平成28年度は6～7月に、全4回のスピーキングに重点を置いたセミナーを、主として本プログラム参加学生や参加を検討している学生を対象に開講した。両セミナーもネイティブの本学英語講師の指導のもと、外国人学生による授業補助を得て、受講学生15～20名程度の小規模クラスでインテンシブレッスンを開講した。

レッスンは、講師が準備するテキストのテーマに基づき、ペア、小グループでのディスカッションや全員の前でのプレゼンテーションを行ったほか、エッセイを書くなど、集中的に英語運用能力をブラッシュアップさせ、学外学修先で活動に積極的に取組めるよう下地を形成したり、より多くの学生が本プログラムに取り組むことを可能にするレッスンとなった。

英語で話す自信を深めることができたという感想が圧倒的に多く、毎回高評を得ている。

これとは別に、法学部で外国人教員による英語のレッスン、工学部で専門分野の英語を学ぶ「工学英語入門」、農学部で英語プレゼンテーション演習等、独自の英語コースを展開し、海外学修先で円滑に英語を運用できるよう英語能力を磐石にする試みが図られている。

(5) ルーブリックの作成と学生による自己評価

各コースに参加した学生の教育成果を客観的に測定するために、プログラム全体で統一したルーブリックを制定した。ルーブリックの評価項目は、本プログラム参加学生が伸ばすことが期待される3つの力、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」とし、各4段階の評価指標（水準0～水準3）を設けた。

本プログラム参加学生は、学外活動学修の前に実施される事前学修、そして学外活動学修終了後に実施される事後学修で、それぞれの評価項目の指標を自己評価している。

本年度前期に実施された計9コースの参加学生を対象に行ったルーブリックの自己評価の集計は、一部コースで事後学修時の自己評価がまだ完了していないものの、いずれの能力においても、コースへの参加によって向上したことが確認されている。

<プログラム目標能力とルーブリック指標>

	水準0	水準1	水準2	水準3
チームワーク力	水準1に達しない段階	一参加者としての段階	周回的立場から運営に関わる段階	リーダー役やマネージャー役を果たす段階
自己修正力	水準1に達しない段階	他者からの指摘に耳を傾ける段階	指摘の意味を把握し自分のものとする段階	自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階
課題挑戦力	水準1に達しない段階	与えられた問題の解決に必要な能力を見極める段階	挑戦する価値のある課題を設定する段階	課題を解決するための方略を策定し不断に挑戦し続ける段階

【自己評価】4：計画を十分実施できた

各取組について計画どおり実施することにより、学生が自己の関心や能力をよく知り、本プログラムへの参加意識や今後の学修の意欲を高められるよう環境整備を行うことができた。また、危機管理学修を狭義の安全管理だけでなく、異文化理解・異文化接触への姿勢といったより広い観点と内容で実施することにより、国際的なフィールドでのコミュニケーションや活動に生かすことができた。

2-1-3. 学生等への広報・波及活動

(1) ウェブサイトの設置、パンフレット、学生募集の説明会等

<ウェブサイト>プログラムの具体的な取組の説明や各コース概要や学生募集等の情報を掲載した専用ウェブサイトを平成28年3月末に開設した。

この開設により、本事業における本学の取組やクォーター制を活用したギャップタームと教養教育改革についても学内外に周知できる環境を整備することができ、学生の学外学修及びプログラム参加に対する意識を向上させることができた。また、本プログラムで学外活動学修を連携する海外諸機関の担当者が本事業を簡便に参照できるよう、英語版サイトも開設した。

開設以来、取組状況を学外へ広く発信するため、本プログラムで実施する各種セミナー、イベント等の案内や報告の更新を重ねている。そして現在、プログラム参加学生の活動記録やフィードバックを掲載するために新たなページを作成しており、プログラム情報発信ツールとしての有用性を高めるべく努めている。

<パンフレット>本プログラムの具体的な取組や手続き、平成28年度開講コースについて説明をしたパンフレットを10,000部作成し、2月より在学生への配布を開始した。また、発達科学部でも実施コースを解

説したパンフレットを 10,000 部発行し、本プログラムパンフレットと併せ、全国のスーパーグローバルハイスクール 112 校、及び近畿圏の主要高等学校 187 校に送付した。また、本プログラムパンフレットは京阪神地域、首都圏や他都市で開催される大学フェアで、6 月から 9 月にかけて配布をし、生徒やその家族、教員に本事業及び、コースの認知を広げ、海外での活動に関心のある学生の本学への入学と大学初年次を含めた本学学生の本プログラムへの参加促進を図ることができた。

11 月より主として現 1 年次と新初年次に配布する平成 29 年度のパンフレット制作を進めている。
<学生募集の説明会>平成 27 年 12 月から平成 28 年 5 月にかけて、平成 28 年度に本プログラムのコースを開講する学部等では、参加学生募集のためコース説明会を実施したほか、海外の大学機関や大手民間企業から講師を招聘し、コース参加意欲を喚起させるセミナーを行った。また、本プログラムの全体説明会を 4 月に 5 回にわたり実施し、様々な形態で学生の関心やモチベーションを促進させた。

(2) キックオフセミナーの実施

平成 28 年 2 月に事業の目的やプログラムの効果を学内にアピールするため、学生を主な対象としてキックオフセミナーを開催した。セミナーは 4 部から構成され、まず、外部講師による国際的なフィールドでの学外学修の効果について講演を行った後、本プログラムの説明をし、続いて海外での学外学修の経験のある学生が自身の体験について報告を行い、最後に平成 28 年度に開講するコース毎に説明ブースを設け、コース担当教員等が参加を希望する学生へ個別の相談に対応した。

キックオフセミナー参加学生の 95%が海外での学修活動に参加したいと回答しており、講演や本プログラムの説明、体験報告では質問の手が多く挙がり学生の関心の高さを窺わせるものであった。

このほか、経済学部では平成 28 年 3 月に、海外の有識者や国内のグローバル機関から外部講師を招聘し、学生に対しプレセミナーを開催した。

キックオフセミナーやプレセミナーを開催することで、事業の目的やプログラムの効果を学内にアピールし、より多くの学生にプログラムの周知を図ることができ、学生の学外学修及びプログラム参加に対する意識を醸成することができた。このことにより、平成 28 年度からのコースの実施に向けて、事業の円滑なスタートが切れたと考えられる。

(3) ホームカミングデイ、大学祭での発表

本プログラムの紹介、前期に実施されたコースの学外活動学修成果の発表は、卒業生が本学に集い、同窓生や恩師と交流を深める行事であるホームカミングデイ（平成 28 年 10 月）と大学祭である六甲祭（同 11 月）で 2 日間、パネル展示で行った。

これらの行事の活用は、学外の一般向けに本プログラムの意義を広く発信するためのほか、本プログラムで実施されるコースのうち国外での学修活動コースに参加する学生の海外渡航費用の一部は、卒業生からも広く寄付が寄せられる神戸大学基金の助成を受けているため、卒業生へ実施コースの活動報告をすることも目的としている。

ホームカミングデイでは、前期実施コース参加学生 10 名が学生補佐員として展示会場の運営にあたり、訪れた卒業生へ学外活動学修の成果を伝える展示の説明を行った。また、同日行われた記念式典では学生の代表が、参加した現地での活動の所感と助成金の謝意を述べた。

続く大学祭でも、述べ 17 名の前期実施コース参加学生が学生補佐員として展示会場の運営を行い、来場者へ本プログラムの紹介や学外活動学修の取組について説明を行ったほか、平成 29 年度開講コースの紹介も行った。

在学生のみならず、高校生の親子連れをはじめとし、幅広い年齢層の来場者が多くあり、学生による活動模様の説明に熱心に聞き入っていたほか、本プログラムの実施目的、参加学生の学修成果などについて関連なやり取りがされることもあった。

両行事での発表は、本事業の意義を学内外に広く伝えるだけでなく、参加学生が参加コースでの取組を振り返りながら第三者に伝える作業を通し、本プログラムの有用性や活動の学修成果を再認識しながら、学修の次段階の方向性を再確認する有効な発表となった。

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

各取組について計画どおり実施することにより、様々な手段で継続的に学生に周知を行うことができた。また、大学祭で高校生等に説明を行うことで、当初の計画よりも多様な社会層に本プログラムについて周知することができた。

2-1-4. 教職員の能力向上

(1) FD・SDの実施

平成27年度のFD・SDセミナーは平成28年3月に、プログラムに関わる教職員を主な対象とし、他大学で海外への学生派遣を担当している教員と、民間企業で新入社員の海外研修プログラムを提供しているコンサルタントを外部講師として招聘し、学生を海外に送り出すにあたり必要な知識、海外での危機管理等についての講演を実施した。

本セミナーではプログラムに関わる教職員が学外学修における学生の安全確保に対する理解を深め、学生を海外に送り出すにあたって必要な知識や海外での危機管理についての知識を身につけることができ、本プログラム実施に向け、より効果的な準備を行うことができた。

平成28年度は、12月初旬に2つのFD・SDセミナーを実施した。一つはクォーター制に関する他大学の事例報告を通じて、本プログラムに関する取組を充実・発展させることを目的としたセミナーであり、もう一つは、本プログラムにおいて本学が独自に設定した3つの目標能力（チームワーク力、自己修正力、課題挑戦力）を、プログラム参加を通して学生が向上させていくために、能動的学修を促進するアクティブ・ラーニングの実践方法を学ぶことを目的としたセミナーを開催した。

その他、学部独自で以下のようなFD・SDを実施した。

・平成27年度

インド国立社会科学研究所フェローによるFD講演会（法学部）

・平成28年度

ニューヨーク市立大学教員によるFD講演会（国際文化学部）

神戸グローバルチャレンジプログラムと発達科学部のアジア・フィールドワークコース（発達科学部でH29年1月に実施予定）

【自己評価】 3：計画通り実施できた

本プログラムに関する準備上の注意点や今後の改善点等についてFD・SDを実施し、プログラムの実施・運営に関わる教職員の能力向上に努めた。

2-1-5. 学生への経済支援

平成28年度実施コースにおいては、神戸大学基金内に神戸GCPによる派遣学生への助成枠を設けるこ

とにより、海外派遣を行い、助成金支給を希望するコース全てに、派遣日数に応じて学生1人あたり4～7万円を補助した。また一部のコースについては、日本学生支援機構の海外留学支援制度により助成を受けた。このことにより、参加学生の経済負担を軽減するだけでなく、より多くの学生が本プログラムに関心を持ち、参加意欲が高まった。

平成29年度実施コースにおいては、神戸GCPとして日本学生支援機構の海外留学支援制度に申請を行っており、神戸大学基金とあわせて学生への経済支援を行う予定である。

【自己評価】4：計画を十分実施できた

海外で学外活動学修を行う学生のうち希望者全員に、神戸大学基金による助成金を支給することができた。また、平成29年度に向けて、神戸大学基金以外の方法でも経済支援を行えるよう、取組を実施した。

2-2. 各コースの実施と自己評価

神戸GCPにおける学外学修コースについては、プログラム委員会で実施について認定を行うこととしており、平成28年度に学外学修を行うコースとして13コースが認定された。そのうち、9コースについては平成28年8～9月に10～30日程度の学外活動学修が行われた。また、平成29年2～3月にも4コースの学外学修が行われる予定である。さらに、平成29年度には新たに4コースにおいて学外学修が実施される予定である。なお、平成28年度に学外活動学修又は事前学修等を実施していないコースについては、コースの自己評価を行っていない。

(1) ハンブルク異文化理解コース（ハンブルクコース）

①平成28年度実施（派遣）

- ・参加学生数：5名
- ・学外活動学修時期：平成28年8月
- ・学外活動学修先：ドイツ ハンブルク

《期待される効果・学修目標》

「異文化理解」をテーマにして、事前に学生自らが企画し、計画・実施することにより異文化を意識化することを目指す。差異に出会った際に戸惑ったり心を閉ざすのではなく、余裕をもって異文化体験を楽しみつつ、なぜそのような差異があるのかを考察し、その差異に関連する課題について発見し、その解決に向けた方策を思考し議論する能力を学生に身につけさせることを学修目標とする。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

平成28年2月末にハンブルク大学を訪問し、来年度から始まるプログラムについて受け入れ先担当者と事業実施の打ち合わせを行った。またいくつかの文化施設などを訪問しフィールドワークの可能性について調査を行った。また、平成28年8月の学生派遣時に受入先機関と調査・打ち合わせを行った。

- ・コースの実施

事前学修において学生自身による企画書作成、フィールドワークに関する講義、危機管理学修、及び派遣先大学への留学経験のあるスチューデントアシスタントによる講演と指導助言や質疑応答等を実施した。

また、学外活動学修においては、学生がハンブルク大学サマースクールの午後のフリータイムを利用して現地でフィールドワークを行った。ハンブルク大学日本学の学生と情報のやり取りをしたり、サマース

クルのスタッフなどから助言やサポートを受けながら、文化施設や歴史的建造物、強制収容所などを訪問し、学生独自に設定したテーマでフィールドワークを行った。

事後学修において学生は学修の振り返りを行い、報告書を作成すると共に、全体報告会での発表に向けて準備を行った。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、プログラムの詳細と参加学生についての情報を受け入れ先当事者と共有することでスムーズな実施に向けた準備ができ、派遣期間・派遣先での学修内容について、要望と提案を具体的に調整することができた。またヨーロッパにおける現地の安全性について情報収集することができた。

コースの実施については、事前学修と学外活動学修により、学生は外国におけるコミュニケーション能力が向上すると共に、チャレンジする行動力と調整力、および様々な気づきを得ることが出来た。また、事後学修で振り返りを行うことで、今後の学修へのつながりを意識化することができた。

派遣先では、学生はハンブルクの歴史や文化を知ると同時に、ドイツ人の生活・考え方・表現の仕方なども含めた異文化を直に体験できた。具体的には、例えば音楽に焦点を当てたテーマを設定した学生は、大小様々なコンサートのプログラムを調査し、教会における合唱も対象にフィールドワークを行い、ドイツ人にとって音楽がどのように生活に浸透しているかを調べることができた。また書店の調査を行った学生は、ハンブルクの書店めぐりをしてどのような種類の本がどのように販売されているかを調査した。テーマを設定して事前にできる限りの準備をした上で現地で調査できたことは貴重な体験であり、また他の学生と協力し、調査方法を微修正しながら、調査を実施でき、今後の学修につながる発見ができた。



(標識についてフィールドワークを行なった学生の発表スライドより)

②平成 29 年度実施（派遣）

平成 29 年度実施（派遣）に関する調査・協議については、今後実施する予定である。

(2) カナダ・トロントの多文化社会研究（トロント大学コース）

①平成 28 年度実施（派遣）

- ・参加学生数 : 16 名
- ・学外活動学修時期 : 平成 28 年 8 月～9 月
- ・学外活動学修先 : カナダ トロント

《期待される効果・学修目標》

トロント市内でのフィールドワークに向けた事前の調査プラン作成、現地での実際のフィールドワーク調査、帰国後の報告会に向けた調査の分析を通じて、参加学生たちは集団での討論能力、企画立案能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力を総合的に涵養することが期待される。また、このトロント市のフィールドワークによって、グローバルな現代社会における移民等の非母語話者による言語使用、言語変容、多文化コミュニティの動態を多様な視点から学ぶことが、本コースの学修目標である。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

平成 28 年 9 月の学生派遣時に、受入先機関と調査・打ち合わせを行った。

・コースの実施

事前学修において学生自身による企画書作成、フィールドワークに関する講義、危機管理学修、及び派遣先大学への留学経験のあるスチューデントアシスタントによる講演と指導助言や質疑応答等を実施した。

学外活動学修においては、8 月 28 日にトロント市の多文化性の実態調査を全員で開始し、8 月 29 日より 9 月 23 日までトロント大学 School of Continuing Studies での英語授業を受講しながら、トロントの多文化社会を理解するために現地で次の 3 つの活動を行った。(1) トロント大学から紹介されたボランティア団体でのボランティア活動 (Baskerfest, Island Girl Run, CBC Toronto 等でのボランティア活動)、(2) コース実施責任者が手配をしたフィールドワークでの調査 (8 月 28 日実施の実態調査、9 月 16 日の国際交流基金トロントセンター訪問、9 月 20 日の現地校小学校授業観察と児童ならびに教員との交流 (McMurrich School)、9 月 24 日のトロント補習授業校 (Japanese School of Toronto Shokokai, Inc.) での授業観察と生徒児童ならびに教員との交流)、(3) 学生独自のテーマに基づくフィールドワークの実施 (テーマ例: カナダの多文化共生への取組、エスニックタウンの現地調査など)

事後学修では学生は学修の振り返りを行い、報告書を作成すると共に、全体報告会での発表に向けて準備を行った。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4: 計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、派遣期間・派遣先での学修内容について、要望と提案をより具体的に調整することができた。

コースの実施については、事前学修と学外活動学修により、学生は外国におけるコミュニケーション能力が向上すると共に、チャレンジする行動力と調整力、および様々な気づきを得ることが出来た。参加した学生は 1 年生と 2 年生の前期にあたり、独自にテーマを設定してフィールドワークを行うという経験がほとんどなかったため、本プログラムで行う内容を理解することに苦労をしていたが、事前学修においてフィールドワーク調査法についての文献を予め読ませて講義を行ったうえで、実際に現地での活動が始まり体験をすることを通じて次第に自身がテーマを設定して調査をするという活動について理解ができるようになった。また、事後学修で振り返りを行うことで、今後の学修へのつながりを意識化することができた。



(トロントの SickKid 基金主催の 5K マラソンでのボランティア活動の様子)

課題としては、現地活動先での学生受入依頼は教員個人のコネクションを基に行っているが、本学学生を恒常的に受け入れ可能な活動先を開発するためには大学が機関として関与することと、受け入れ先にとってもプラスになるような双方型の活動にすることが必要である。また、コース実施に係る担当教員の業務が、事前・事後学修の実施、成績提出などの教務処理、渡航先での学生のマネジメント、渡航後の学務部への報告書作成、発表会展示物の作成、及び報告会等における監督業務と煩雑であり、手続きの簡略化等が課題である。

②平成 29 年度実施（派遣）

平成 29 年度実施（派遣）に関する調査・協議については、今後実施する予定である。

（3）アジア・フィールドワークコース

①平成 28 年度実施（派遣）

- ・参加学生数 : 5 名
- ・学外活動学修時期 : 平成 28 年 8 月～9 月
- ・学外活動学修先 : インドネシア

《期待される効果・学修目標》

参加学生は、言語や宗教、文化の異なるコミュニティにおいて自己表現方法を学ぶ。さらに現地の大学生、地域住民、地方行政など様々な立場の人々から協力を得ながら、自らが立案したフィールドワークを遂行し、その成果や体験を報告書にまとめ、発表するという一連のプロセスを学ぶ。これらの短期フィールドワーク経験を通して、国や地域を超えた様々な問題に対して、グローバルな視点とローカルな視点の両面から捉えようとする探究心を育てる。そして、将来的には国際的な広がりをもった就職や研究活動に目を向ける契機となることが期待される。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

受入機関であるインドネシアのハサヌディン大学およびプログラム実施場所（シンジャイ県）を訪問し、関係者への協力依頼・調査・協議を行った。なお、平成 27 年度には、新規受け入れ先候補として中国の上海交通大学およびラオス国のサバナケットマラリアステーションを訪問し、調査・交渉を行った。

- ・コースの実施

事前学修において、学生は、①安全対策・病気予防、②宗教、文化及びマナーを座学講義によって学ぶとともに、現地フィールドにおいて、自ら課題を設定し、それをどのように学んでいくかを計画・立案できるよう、フィールド調査の基礎を実習形式で学んだ。

学外活動学修において、参加学生は本学の他の学生及びハサヌディン大学の学生とともに、南スラウェシ州シンジャイ県のトンケ・トンケ村を中心に学外活動学修を行った。ホームステイ前には海洋実習及びカウンターパート機関のハサヌディン大学の学長を表敬訪問し、ホームステイ期間には現地の高校訪問やマングローブ植林、海藻養殖場の視察などを行った。ホームステイ終了時は学生主体でお別れ会を企画し、お世話になった村の方々に日本食をふるまった。その後、ハサヌディン大学で本コース参加について報告を行った。

事後学修では学生は学修の振り返りを行い、報告書を作成するとともに、全体報告会での発表に向けて準備を行った。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、ハサヌディン大学側とプログラム実施要領や安全対策に関して情報共有し、具体的なサポート体制の提案やプログラム内容に関するアドバイスを得た。地方政府や住民グループからも学生ホームステイや野外活動への協力承諾を得た。また、上海交通大学の Wu Deyi 教授から上海を中心とした水域環境問題に関するフィールドワーク受け入れの内諾を得た。ラオス国に関しては、現地機関との交渉を継続することとなった。

コースを通じて、参加学生は日本と大きく異なる文化、社会、環境等に触れ、グローバル社会についての理解を体験的に深め、視野を広げたほか、グループでの活動等を通じて、コミュニケーション能力、企画・実行能力などを高めた。学生は学外活動学修当初、初めて触れるインドネシアの生活習慣や文化の違いへの戸惑いもあったが、ハサヌディン大学の学生や現地の方のサポートの下、高いコミュニケーション能力を発揮し、言葉の壁を乗り越えてそれぞれのホームステイ先や地域コミュニティに馴染むことができた。同時に学生は、限られた日数の中で、与えられた情報ではなく、自ら見たり聞いたりしたものから地域の現状や問題を把握し、学生自ら課題を見つけていく事の難しさも実感することができたのではないかとと思われる。



(マングローブ植林の様子)

なお、学外活動学修の時期を9月としたものの、コースに関心がありながら課外活動などとの関係で参加に至らなかった学生がいた。今後、改善の余地があるか検討を行いたい。

②平成 29 年度実施（派遣）

平成 28 年 12 月に、次年度以降の学生派遣に向けた、中国上海交通大学等への訪問・調査を予定している。今後、アジア・フィールドワークコースを含む学生交流プログラムの実施、及び JASSO 等の助成金申請を行うにあたって、ハサヌディン大学との MOU 締結の必要性を検討したい。

（4）Lawyering in Asia コース

①平成 28 年度実施（派遣）

- ・参加学生数 : 4 名
- ・学外活動学修時期 : 平成 28 年 8 月～9 月
- ・学外活動学修先 : マレーシア クアラルンプール

《期待される効果・学修目標》

日本経済の近未来は東南アジアを中心としたアジア諸国の経済発展を支援し、それを日本の経済社会の発展へとどこまで取り込んでいけるかにかかっているといっても過言ではない。そうしたビジネス活動に伴う法律業務に実践的に対応できる人材を養成していく体制を整えることは、神戸大学法学部が日本社会に貢献するために強く求められている。また、海外の法律家だけではなく、同じ日本で法律を学ぶ世代の異なった先輩達とも協働できる社会スキルが、現代の若者に強く求められている。さらに仕事で用いる英語での実践的なコミュニケーション能力の養成が必要となる。このコースに参加した学生は、そうした面において無理なく成長を遂げることが可能となる。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

5 月に香港の法律事務所を訪問し、インターンシップに関する協議を行った。なお、平成 28 年度については、過去に学生受入実績のあるマレーシアの法律事務所を学生受入先とした。

- ・コースの実施

事前学修においては、アジアにおける法文化や法制度に関する基礎知識をえるための講義と、それを補うための文献（日本語・英語）の購読により、学生が自分の問題意識に基づいてインターンシップでの目標

を設定した。加えて、危機管理学修を実施した。

学外活動学修においては、マレーシアのクアラルンプールにある「ジェフ・レオン、プーン&ウォン法律事務所」(JLPW)において、インターンシップを行った。学生は実習期間中に、当該法律事務所が扱う合弁事業の合意書の閲覧や、会議への同行、現地の裁判所や日本大使館、マレーシア国立大学や MIDA (マレーシア投資開発庁) など各種機関への訪問など多岐にわたる活動を行った。

また事後学修では、参加学生による現地での活動に関するプレゼンテーションを基に、教員や他の学生とディスカッションを行い、活動の総仕上げをした。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、香港におけるインターンシップの実施に向け、実質的な協議を行うことができた。

コースの実施においては、参加学生は、全員が1年生ということもあり、法律事務所での法律の専門知識の面では苦労したこともあったようだが、事務所の弁護士や修習生、本学大学院生からも指導を受ける中で、日本とマレーシアの法制度の違いや、法律事務所での仕事の雰囲気を掴むことができたようである。また、参加学生は約1か月間海外での生活を送る中で、英語でのコミュニケーション意欲の向上や、異文化に対する理解や関心を高めている。

参加学生からは、国際私法により興味関心を持ち、今後海外での模擬商事仲裁大会に参加したい等の声が挙がっていることから、本実習の実施により、参加学生が今後さらなる国際的な活動への参加に繋げていくために必要な能力を修得する成果をあげることができたと認識している。



②平成 29 年度実施 (派遣)

平成 29 年度は神戸 GCP としては開講しない予定である。

(5) 国際産官学連携スタートアップコース (国際連携スタートアップコース)

①平成 28 年度実施 (派遣)

- ・参加学生数 : 40 名
- ・学外活動学修時期 : 平成 28 年 8 ～ 9 月
- ・学外活動学修先 : 国内

《期待される効果・学修目標》

経済学部で学ぶ多くの学生が、大学での学びが社会的に意味のあるものであることを実感して1年後半以降の勉学へのモチベーションを高めることを目標とする。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

平成 28 年 1 月及び 2 月にベルギー大使館、AWEX (ベルギー王国ワロン地域政府 貿易・外国投資振興庁)、JICA、外務省及び海外展開をしている企業を来訪し、学生受け入れの開拓・調査、及び講演依頼を行った。また、多くの企業関係者も参加した、早稲田大学政治経済学部の OB・OG 会である政経稲門会の

神戸 GCP 関係の講演会にパネリストとして参加した。さらに、兵庫県経営者協会などを通じて働きかけ、多くの派遣先を確保した。

・コースの実施

事前学修においては、夏休みの学外活動学修の計画にむけて、企業訪問マナーや心得などの講習、勉強の仕方などについて学内で事前研修を行った。

学外活動学修においては、学生が在日国際機関及び、海外展開をしている企業や公的機関の計 12 箇所を訪問した。関連して、P&G による講演会およびワークショップを開催した。

また、事後学修においては、報告書の作成、次学期の履修計画を作成させた。

《成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、本プログラムの意図と経済学部・研究科の目指す国際的人材育成の方針に先方より賛意があり、多くの機関において学生の受入及び講演の実施が決定した。このことにより学生の選択肢が増し、視野を広めることができた。また、政経稲門会の講演では、パネルディスカッションの際にプログラムについて広報・周知した。

コースの実施については、学生が現地に赴き実際に業務に携わっている人の話を聞くことで、キャリアへの意識を高めるだけでなく、大学で学んだ経済学や経済事情と「実態」とのつながりを認識する上で効果があった。課題としては、より専門知識（特に経済学や経済事情）との関わりを意識したプログラムとしていくことが必要である。



(プログラムの成果について意見交換)

②平成 29 年度実施（派遣）

平成 29 年度は神戸 GCP としては開講しない予定である。

（6）国際産官学連携アドバンストコース（国際連携アドバンストコース）

①平成 28 年度実施（派遣）

- ・参加学生数 : 1 名
- ・学外活動学修時期 : 平成 28 年 8 月
- ・学外活動学修先 : ベトナム

《期待される効果・学修目標》

1 年次のスタートアッププログラムを受講した学生を主に対象として、特にグローバルに活躍したいという強い意志をもった特別プログラムを履修する学生が世界で活躍するために必要な知識と能力の習得の仕方を身につけさせることを目標とする。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

平成 28 年 3 月にベトナムにある貿易大学を訪問し、本プログラムについて意見交換を行った。

- ・コースの実施

事前学修においては、サマースクール、インターンシップに向けた海外生活、安全管理等の実践的な内

容を含む研修を行い、学生が履修計画書を作成した。

学外活動学修においては、学生が履修計画に従い、サマースクールによる学外研修を行った。

事後学修においては、報告書の作成及び次学期の履修計画を作成させた。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、本プログラムの意図と経済学部・研究科の目指す国際的人材育成の方針に先方より賛意があり、平成 28 年度より実施する 2 年次を対象とした協定校とのサマースクールを中心とした海外研修に関して事前の打ち合わせを行い、昨今の国際情勢のもとでサマースクール等に付随してインターンシップを実施する可能性についても検討した。

コースの実施においては、現地に行くことや実際に業務に携わっている人の話を聞くことでキャリアへの意識を高めることに止まらず、大学で学んだ経済学や経事情情と「実態」とのつながりを認識する上で効果があった。課題としては、より専門知識（特に経済学や経済事情）との関わりを意識したプログラムとしていくことが必要である。



(クロージング)

②平成 29 年度実施（派遣）

平成 29 年度実施（派遣）に関する調査・協議については、今後実施する予定である。

（7）UPLB 農学英语コース（UPLB コース）

①平成 28 年度実施（派遣）

- ・参加学生数 : 19 名
- ・学外活動学修時期：平成 28 年 9 月
- ・学外活動学修先 : フィリピン

《期待される効果・学修目標》

専門分野に関する深い知識と洞察力を持ったうえで、英語で自由にコミュニケーションを行う能力を培い、多様な価値観・考え方を尊重しながら自己表現できる国際性を兼ね備えたグローバル人材の養成を目指す。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

受入先機関への派遣実績が過去にあるため、新たな調査は行わなかった。

- ・コースの実施

事前学修においては、UPLB より外国人教員を招聘し、学生向けに 1 週間の英語プレゼンテーション演習を行った。また、グループごとにテーマを決め学修方針を決定した。合わせて、危機管理学修及び簡単なタガログ語レッスンも行った。

学外活動学修においては、学生はフィリピン大学ロスバニョス校（UPLB）にて、毎日 9:00 から 16:00 までの 6 時間英語集中講義を受け、発音・語彙・表現法のトレーニングに加え、英語によるプレゼンテーション・ディベートの訓練を受けた。また、夕方 16:00-18:00 は、Guided Interaction の時間とし、日本人学生 4～5 名に 1 人の UPLB 学生がついて、さまざまな文化交流・Discussion を行った。さらに週末には、(i) International Rice Research Institute (IRRI、国際稲研究所)、(ii) Makling Botanic Gardens

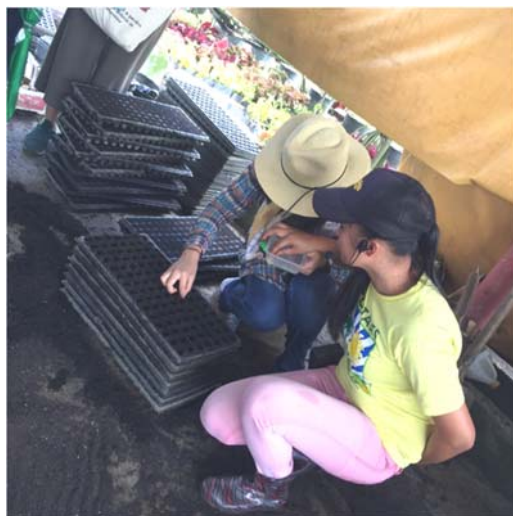
(植物園)、 (iii) UPLB Museum of Natural History (自然史博物館)、 (iv) Costales Farm (有機農場) を訪問した。

事後学修においては、和文・英文でのレポートの作成、合同報告会に向けた準備を行った。さらに、UPLB スタッフから送付される成績報告書をもとに各人の能力をさらにアップさせるための指導を行った。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4 : 計画を十分実施できた

コースの実施においては、英語集中講義により、英語による表現力・プレゼン能力が飛躍的に向上した。また、UPLB 学生との文化交流・Discussion によって、異国の文化を理解し、尊重する国際性が身に付いた。各期間の訪問においては、アジア農業の中心となっているイネ等の作物に関する知識を深めるとともに、アジアの農業について学んだ。さらに、英語で質疑応答を行うなかで、学問における「武器」として使える実践的英語力が身に付いた。



(地元農場の訪問)

②平成 29 年度実施 (派遣)

受入先機関への派遣実績が過去にあるため、新たな調査は行っていない。

(8) EU フィールドワークコース (KUPES コース)

①平成 28 年度実施 (派遣)

本コースでは学外活動学修を平成 29 年 2 ～ 3 月に実施する予定である。

- ・参加学生数 : 7 名 (予定)
- ・学外活動学修時期 : 平成 29 年 2 ～ 3 月
- ・学外活動学修先 : ベルギー (EU 関連機関、本学協定校 : Gent, KUL 等) を中心に、その他ルクセンブルグ、フランス、ドイツ、イギリス等及び日本 (関西及び東京) (予定)

《期待される効果・学修目標》

「日欧比較」をテーマに、学生自らが企画し、計画・実施することにより、日欧が抱える共通課題を深く知ること、及び現地に赴くことで、その解決に向けた方策を思考する能力を学生に身に付けさせることを学修目標とする。フィールドでの実践活動を経て、さらなるチャレンジ精神が鍛えられ、確実に 3 年後期からの交換留学につながり、学生のさらなる成長と飛躍が期待できるのみならず、事後学修には下級生となる新 KUPES (※) 生も参加するため、異学年の交流が生み出す学修上の相乗効果と、次年度以降の活動 (本コース) の持続と発展のサイクルが生まれる。

※本コースでは EU エキスパート人材養成プログラム (KUPES) の参加学生をコース参加対象としている。KUPES は国際文化・法・経済の 3 学部・研究科の学生を対象とし、EU (欧州連合) に関してそれぞれの専門分野と学際的観点から多面的かつ体系的に学ぶ学位プログラム。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

(1) 平成 27 年 10 月に教員 2 名をベルギー、ドイツ、フランスへと派遣し、大学や産業界でのフィールドワーク実施について担当者と意見交換を行った。(2) 平成 28 年 2 月に、KUPES 担当外国人教員が

ら紹介されたイタリアのフィールドワーク先に、当時留学中でフィールドワーク実施を希望する KUPES 学生を送り出し、日欧連携教育府教員 1 名が同行した。(3) 平成 28 年 3 月には、他機関予算で実施し 10 名の KUPES 生が参加した海外研修(ドイツ)にコース実施責任者を含む日欧連携教育府教員 2 名が、他機関が実施する政府機関等訪問プログラムに参加した。(4) 加えて、学生の多様な関心に応えられるよう日欧のフィールドワーク先を引き続き開拓していく予定である。(実施責任者が平成 29 年 1 月～2 月に東京出張予定)

・コースの実施

コースの実施に先立ち、学生はフィールドワーク先のリストを参考に予め学外活動の計画を立て、受講者決定後、フィールドワークのテーマに応じてグループに分け、全体またはグループ毎にリサーチの内容・方法について定期的に(週 1 回程度)ミーティングを行った。

今後の予定については、平成 29 年 2 月の学外活動学修前に、事前学修として中間報告会(12 月 20 日の日欧比較セミナーの授業にてグループ別にフィールドワーク計画の報告と教員・参加学生からのフィードバック)及び Spring camp(英語集中コース)を開催する予定である。学外活動学修については、平成 29 年 2 月～3 月に実施する予定である。事後学修については、事後学修期間又は平成 29 年 3 月に開催予定の KUPES 合宿にて、コース参加者の報告会を行う予定である。また、GCP の全体報告会について、来年度開催分(4 月頃)に参加予定である。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4: 計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、(1) ドイツ訪問先機関からフィールドワーク受入について協力いただけるとの積極的な回答をいただくとともに、ベルギー、フランスの訪問先大学では共同授業や受入についての協議に加えフィールドワーク先支援協力をこぎつけることができ、今後のコース開発につながる事が期待される。(2) 留学中の KUPES 生によるイタリアでのフィールドワークを通じて、来年度以降のフィールドワーク先を確保するとともに連携強化につなげることができた。(3) コース実施責任者が海外研修に参加し、訪問先機関とのネットワークを築き、次年度以降のコースに支援いただくことが期待できる。

課題としては、KUPES3 期生全員(辞退者を除き 18 名)を対象に履修者を募集したが、主に欧州での学外活動の費用が負担できない、活動期間の都合が悪い・予定が分からない等の理由で 7 名(4 割弱)の履修者数に留まった。これらの理由を考慮し来年度のコース内容・スケジュールの見直しを行う。

②平成 29 年度実施(派遣)

平成 29 年度実施(派遣)に関する調査・協議については、平成 29 年 2 月～3 月に実施予定の学外活動学修時(現地関係者と打ち合わせ)及び終了後に活動結果をもとに行う予定である。

(9) グローバルチャレンジコース(学生企画型)

①平成 28 年度実施(派遣)

本コースでは学外活動学修を平成 29 年 2～3 月に実施する予定である。

- ・参加学生数 : 1～2 名 (予定)
- ・学外活動学修時期: 平成 28 年 2～3 月 (予定)
- ・学外活動学修先 : ネパール (予定)

《期待される効果・学修目標》

本コースでは、学生自らが海外学修活動を企画し、計画・実施することにより、自己を客観視して自己を知り、グローバル化が進む日本社会や国際社会が抱える課題や現場について深く知ることができる。また、現場にある一定期間身を置くことによりで、新たな課題を発見し、その解決に向けた方策を思考する能力を身につけることのほか、現地の生活で直面する様々な壁を一つ一つ乗り越えていく力を身につけることを学修目標とする。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

インターンシップチャレンジコース・ボランティアチャレンジコース・フィールドワークチャレンジコース・グローバルチャレンジコース（以下「チャレンジコース」という）の事前調査・協議のため、1月にモンゴル・韓国、2月にミャンマー・タイ、3月にドイツ・ブルガリア及び9月にラオスを訪問した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

学生受入の可能性や学外活動学修の方法及び内容を探るため、多様な地域及び分野に調査を行った。

②平成 29 年度実施（派遣）

平成 29 年度実施（派遣）に関する調査・協議については、今後実施する予定である。

また、当該コースへの参加学生を増強するために、コース参加の呼びかけに改善の余地があるか検討したい。

（10）インターンシップチャレンジコース（インターンシップコース）

①平成 28 年度実施（派遣）

- ・参加学生数：3名
- ・学外活動学修時期：平成 28 年 9 月
- ・学外活動学修先：ミャンマー

《期待される効果・学修目標》

【効果】海外に身をおくことで自己を客観視して自分を知り、キャリアパスを考えるきっかけを与えること、また、日本社会を再発見して日本の常識は世界の常識ではないということを身をもって知る。

【学修目標】海外では、訪問先の人々のサポートがなければ健全な社会生活ができないという実体験を通して、訪問国/地域の文化、歴史、宗教、慣習等を深く知り、相手国、人への敬意が重要であるということを再認識すること。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

平成 28 年 2 月に、ミャンマー・タイのコース実施予定機関を訪問し、受入に際してのプログラム実施方針、要望について意見を交わし、双方がコース運営をしやすい体制作りを行った。また、チャレンジコースの事前調査・協議のため、1月にモンゴル・韓国、3月にドイツ・ブルガリア、9月にラオスを訪問した。

- ・コースの実施

事前学修では、渡航国のことを様々な角度から学んだほか、現地受入先期間で行う活動プランについては学生が主体となり、現地の人々、環境等を考慮しながら計画、準備を行った。併行して、渡航の最終準備段階として海外渡航の危機管理学修、渡航直前のオリエンテーションを実施した。

学外活動学修においては、(1) ティンミャンマー日本語学校にて、日本語教材の校正補助業務や日本語教育補助業務、日本文化紹介の授業を行い、(2) 「ミャンマー神戸大学同窓会」の協力の下、経済面、政治面で急速に変化を遂げつつあるミャンマーで、日本国大使館、JICA、日系企業で活躍する本学の諸先輩を訪問した。また、(3) 滞在先においては、ミャンマー人学生と一緒に生活を共にした。

事後学修においては、学外活動学修のフィードバックを行うほか、全体報告会での報告発表や展示物の準備を進めた。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、ミャンマーの教育機関の協力を得、かつ現地神戸大学同窓会のサポートによりコース立案、学生向けコース紹介のために実施計画詳細を現地受入先機関と最終調整し、学生を派遣することができた。また、チャレンジコース全体において、モンゴル、タイの教育機関、ラオスの現地関係機関についても今年度の受け入れについて協力を得ることができた。ドイツでのコースについてはコース内容充実化のために、受入先交渉範囲を広げ、候補組織、団体へ受入可否を打診中である。また、ブルガリアについては、幣学のニーズと受入先方針に若干差異があるため、実施可能な形態を協議中である。

コースの実施においては、(1) 学生にとって海外で日本語を第二言語として教えることを実践できる貴重な機会となり、自分かを客観的に見る機会となった。(2) 多様に活躍するグローバル人材から直接話を聞くことで、学生一人一人が自身の将来的なキャリアについて考えるきっかけとなった。(3) ミャンマー、及びミャンマー人への理解が深まり、将来的にミャンマーで活動したいという希望が芽生え、そのためにどのようなスキルや技術を身につければよいか、次なる学修目標ができた。また、言葉、価値観、物事へのアプローチ等異なる環境の中で生活や活動することにより、日本のように、又は自分の思うとおりに相手が動かない、物事が進まないことも多く、試行錯誤を重ね、それらを一つ一つ乗り越えながら活動することを通じ、現地の人々へ愛着が湧いたり、現地への理解が深めたり、普段の自分たちの生活や環境を見直す機会となった。このことは今後のキャリア形成のために積みたい活動を検討したり、今後、その国に戻って何か活動するために、どのようなスキルや技術を身につけるか次の学修目標を見定めることに繋がった。

事後学修では、学外学修で培われたチームワークと現地で同じ活動を共に進めてきた連帯感から、学生主導でスムーズに互いの意見をまとめながら、全体報告会の報告発表や展示物の準備を進めることができた。

課題としては、参加学生の増強を図るため、募集広報の方法等について工夫が必要である。また、事後学修の時間の使い方について見直す必要がある。



(子どもたちに日本語を教える学生)

②平成 29 年度実施（派遣）

学生の受入先の開拓や調査は、平成 29 年度はインターンシップコースの学外学修先として、モンゴル、インド、ベトナムの関係機関とコース実施に向け、現地出張（モンゴル）や担当者の日本出張の機会（インド、ベトナム）を利用し、意見交換を重ねた。

その結果、モンゴルとインドについてはミャンマーと同じく日本語指導補助を主としたインターンシップコースを、モンゴルは高等教育機関、かつ現地神戸大学同窓会のサポートにより、またインドは、現地

日本語学校の協力のもとコースを開講予定となった。

また、ベトナムについては現地に進出する日系企業向けのコンサルタント会社での企業インターンを実施の予定である。これら三ヶ国の受入先機関とは現在、実施に向け詳細を検討、調整中である。

(11) フィールドワークチャレンジコース (フィールドワークコース)

①平成 28 年度実施 (派遣)

本コースでは学外活動学修を平成 29 年 2 月に実施する予定である。

- ・参加学生数 : 5 名 (予定)
- ・学外活動学修時期 : 平成 29 年 2 月 (予定)
- ・学外活動学修先 : ミャンマー・タイ (予定)

《期待される効果・学修目標》

【効果】マスコミによる報道ではなく、急激に変化しつつある ASEAN 諸国の現在を自分の眼で見て確かめることを通して、ともすれば狭くなりがちな自身の考え方、近未来の姿自分のキャリアにインパクトを与える効果が期待される。

【学修目標】事前学修を通して学んだことをベースに現地で活躍する日本人をはじめ、ローカルの方々に対してインタビューを行ったり、同年配の若者同士との意見交換を通して異文化理解を深め、多様な気づきを明確化させることを目標とする。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

平成 28 年 2 月に、ミャンマー・タイのコース実施予定機関を訪問し、受入に際してのプログラム実施方針、要望について意見を交わし、双方がコース運営をしやすい体制作りを行った。また、チャレンジコースの事前調査・協議のため、1 月にモンゴル・韓国、3 月にドイツ・ブルガリア、9 月にラオスを訪問した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3 : 計画通り実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、今年度はミャンマー、タイともに教育機関の協力を得、かつ現地神戸大学同窓会のサポートによりコース立案、学生向けコース紹介のために実施計画詳細を現地受入先機関と最終調整し、学生を派遣することができた。また、次年度の実施に向け、タイの教育機関、及びタイ神戸大学同窓会のサポートの協力を得ることができた。また、神戸大学同窓会ネットワークを使つてのフィールドワークは、ドイツでも計画しており、コース内容充実化のために、受入先交渉範囲を広げ、候補組織、団体へ受入可否を打診中である。また、ブルガリアについては、幣学のニーズと受入先方針に若干差異があるため、実施可能な形態を協議中である。

②平成 29 年度実施 (派遣)

今年度コースを実施したミャンマー、タイのほか、ドイツ、マレーシアで実施することを予定しており、それぞれ現地連携機関とコース内容について検討、調整中である。

また、今年度ボランティアチャレンジコースに分類されていたネパールとラオスのコースも、ボランティア期間を通じてフィールドワークの要素が強いため、フィールドワークコースに汲み込むことになった。

(12) ボランティアチャレンジコース (ボランティアコース)

①平成 28 年度実施 (派遣)

平成 28 年度は 2 回 (平成 28 年 9 月 (夏実施コース)、及び平成 29 年 2～3 月 (春実施コース)) 実施する予定である。

- ・参加学生数 : 3 名 (夏実施コース)、3 名 (春実施コース (予定))
- ・学外活動学修時期 : 平成 28 年 9 月 (夏実施コース)、平成 29 年 2～3 月 (春実施コース (予定))
- ・学外活動学修先 : ネパール (夏実施コース)、ラオス (春実施コース (予定))

《期待される効果・学修目標》

【効果】実際に現地でのボランティア活動を通して「言葉の通じない現地の人たちと共に働くことを通じてコミュニケーション能力を高め、異文化理解を深めて協働者といかにして信頼関係を構築するのか」といったことを肌で学ぶ効果がある。

【学修目標】自分たちと全く異なる環境で暮らす人々とともに作業をすることで、現地の人から学ぶ重要性を認識し、そこで暮らす人々にとって効果のある活動は何かを考えたり、個々が今後身につけたい知識、技術を見つけたり、いろいろな問題に直面した際の解決能力を伸ばしたり、他人や自然をいつくしむ心を育成する。

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

春コース実施に向け、平成 28 年 9 月にラオスを訪問し、活動受入先を開拓すると同時に、実施にあたり現地関係機関と連携するためのネットワーク作りを行った。また、チャレンジコースの事前調査・協議のため、1 月にモンゴル・韓国、2 月に、ミャンマー・タイ、及び 3 月にドイツ・ブルガリアを訪問した。

- ・コースの実施 (夏実施コース)

事前学修では、渡航国のことを様々な角度から学んだほか、現地受入先期間で行う活動プランについては学生が主体となり、現地の人々、環境等を考慮しながら計画、準備を行った。併行して、渡航の最終準備段階として海外渡航の危機管理学修、渡航直前のオリエンテーションを実施した。

学外活動学修においては、(1) カトマンドゥにおいて JICA ネパールを訪問し、現在の震災復興事業の状況について理解を深め、その他カトマンドゥ市、ラリトプル市パタン地区の歴史的文化的施設や住宅地で震災復興事業現状について現場視察を行った。(2) ダディン郡クンプール VDC アダントール村の Satyawati Higher Secondary School にて、情操教育や体育を中心とした青少年活動を行ったり、教職員/生徒たちに日本の学校で行われている避難訓練を行い、そのノウハウを学んでもらった。(3) コミュニティ開発を促進する現地 NGO, YOUCASP-Nepal のメンバーより村の発展の歴史、国際協力、村のインフラ整備や村落開発のレクチャーを受けたほか、村の若者たちと共にコミュニティ内の清掃活動を行ったり地元の高校の生徒たちと意見交換会を行った。(4) その他、村の人の家でのホームステイや村内の農場で機械化されていない農業を体験したり、全く復興の目処がつかない震災の被災現場を見学し、日本のライフスタイルとの違いや物事の問題解消、改善に対するスタンスやスピードの違いなどを学んだ。(5) ポカラにおいて訪問した高校の学生寮 (さくら寮) では、ネパールの女子教育の現状を学んだほか、参加学生はほぼ同世代の現地学生たちと意見交換を行い、日ネのものの考え方の違い、感覚の違いについて知る機会となった。

事後学修においては、学外学修で培われたチームワークと現地で同じ活動を共に進めてきた連帯感から、学生主導でスムーズに互いの意見をまとめながら、全体報告会の報告発表や展示物の準備を進めることができた。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 3：計画通り実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、ネパール、ラオスとも現地関係機関と調整し、それぞれ9月と来年2月に本コースを開講することができた。コースの事前調査を行ったその他の国々で、ボランティア活動が含まれるコースの企画立案に至っていないが、これらの国々でのボランティア活動の受入先については現在、調査中である。

夏実施コースの実施においては、(1) 現在はメディアにもほとんど取り上げられなくなった現地の状況について、JICA 訪問や現場で生活や活動をすることで、状況を把握することができた。(2) 小学生たちと活動を共にすることにより、学生は、自分たちが指導したいことがうまく進まないとき、なぜうまくいかないのか、どのようなやり方が伝わりやすいのかと、問題解消に向けて自分なりに考え、動くきっかけとなった。かつ、そのような試行錯誤を重ねながら、短いながらも真摯に子どもたちと向き合うことで、彼らから慕われるようになり、このことが学生によってはキャリア形成のために今後積んでみたい活動を検討する際、影響が見られた。(3) そのような場で村の人たちと交わったときに耳にした彼らの発言内容は、学生にとって国際協力の支援のあり方などを深く考える機会となった。(4) 普段の自分たち個々の生活や環境を見直す機会となった。併行して、それらについて多面的に深く考えることにより、異文化理解を深める機会となった(5) 参加学生にとっては日本人とネパール人の価値観、考え方の違いなどを知る機会となった。



(子どもに折り紙を教える学生)

また、言葉、価値観、物事へのアプローチ等異なる環境の中で生活や活動することにより、日本のように、又は自分の思うとおりに相手が動かない、物事が進まないことも多く、試行錯誤を重ね、それらを一つ一つ乗り越えながら活動することを通じ、現地の人々へ愛着

が湧いたり、現地への理解が深めたり、普段の自分たちの生活や環境を見直す機会となった。このことは今後のキャリア形成のために積みたい活動を検討したり、今後、その国に戻って何か活動するために、どのようなスキルや技術を身につけるか次の学修目標を見定めることに繋がった。

課題としては、参加学生の増強を図るため、募集広報の方法等について工夫が必要である。また、事後学修の時間の使い方について見直す必要がある。

②平成 29 年度実施（派遣）

次年度も引き続き、ネパールとラオスでの今年度の活動内容は実施する予定であるが、フィールドワークコースとして実施予定である。これらの国々のほか、ミャンマーとタイ、モンゴル、ドイツでボランティア要素のあるこのような活動ができる機関について調査、受入先へ受入可否を打診中である。

(13) ニューヨークのアートとフィールドワークコース（ニューヨークコース）

①平成 28 年度実施（派遣）

《期待される効果・学修目標》

ニューヨーク市内のフィールドワークに向けた事前の調査プランづくり、現地での実際のフィールドワーク調査、帰国後の報告会に向けた調査の分析をつうじて、参加学生たちは集団での討論能力、企画立案

能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力、歴史にたいする想像力を総合的に涵養することが期待される。また、このニューヨーク市のフィールドワーク調査によって、グローバルな現代社会における移民、都市空間の変容、多文化コミュニティの動態を歴史的視野から学ぶことが、本コースの学修目標である。

《実施内容》

特になし。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】2：計画通り十分に実施できなかった

本コースについては、参加学生の募集を行ったものの参加希望学生数が最小開講人数に満たなかったため、平成28年度は実施されなかった。

②平成29年度実施（派遣）

次年度の受け入れ先の開拓・調整のため、平成28年7月にニューヨーク市立大学スタッフと協議を行い、要望と提案を具体的に調整することができた。なお、平成29年度の実施においては、コース名を「ニューヨークのアートとファイナンスのフィールドワーク」に変更し、フィールドワーク調査によって米国におけるアートとファイナンスの動態を学ぶことを学修目標とする予定である。

（14）ギャップターム海外協定派遣コース

①平成28年度実施（派遣）

本コースは平成27年度から学生受入先の開拓・調査を開始しているが、平成28年度に学生募集と学内での事前学修として「工学英語入門」を開講し、学外活動学修は平成29年度に開始する予定である。

②平成29年度実施（派遣）

《期待される効果・学修目標》

下記の各項の目標の達成による、「工学をグローバルに学ぶことへの動機づけ」が効果として期待される。

- ・英語コミュニケーション力の向上
- ・英語による工学知識を習得可能とする能力の向上
- ・国内外でのインターンシップ等および協定校での体験を通して日本の、ひいては各自の進むべき方向性を見出し、広い視野を獲得すること

《実施内容》

- ・学生受入先の開拓・調査

国立台湾大学（台湾）、リンショピン大学（スウェーデン）、RMIT 大学とニューサウスウェールズ（ともにオーストラリア）に訪問し、学生受け入れ先の開拓・調査を行った。また海外派遣と平行して実施するグローバル企業研修の受入企業開拓・調査を行った。

- ・コースの実施

平成29年度の学外活動学修に向け、平成28年7月に参加学生を選抜した。また、10月から参加学生を対象に、事前学修の一環として「工学英語入門」の講義を開始した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

学生受入先の開拓・調査においては、平成 29 年度はリンショピン大学、30 年度は国立台湾大学、31 年度は RMIT 大学に学生を派遣することで、いずれの大学とも合意した。またいずれの機関とも宿泊設備も整備されており、学生の受け入れに支障がないことがわかった。また人材・市場・資材の国際化を現場で体験学修するグローバル企業研修の受入企業、公的機関の開拓を行い、数社の内諾を得た。

コースの実施においては、海外研修先での学術的な議論を行うために必要な語学力の向上が図れつつある。

(15) 理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース (理学 UPLB コース)

(16) 理学グローバルチャレンジ Tsinghua/Life コース (理学 Tsinghua)

(17) 理学グローバルチャレンジ Nangyang/Sci コース (理学 Nangyang)

上記 3 コースについては、平成 28 年度から取組を開始し、学外活動学修は平成 29 年度から開始される予定である。そのため、実施内容については 3 コース合わせて記載する。

①平成 28 年度実施 (派遣)

平成 29 年度開始のコースであるため該当なし。

②平成 29 年度実施 (派遣)

H29 年度プログラム実施のための準備として、(1) 平成 28 年 7 月に神戸大学に来訪中のフィリピン・UPLB の担当責任者と面談し、学生受入先の開拓・調査を行った。(2) 平成 28 年 6 月に中国・北京・清華大学・生命科学院、8 月にシンガポール・南洋理工大学、及び 9 月にフィリピン・UPLB を訪問し、担当責任者等との面談及び施設見学を行い、学生受入先の開拓・調査を行った。

この結果、(1) フィリピン・UPLB 側担当責任者との協議の結果、平成 29 年度に定員 5 名ということで、神戸大・農学部と共催の形で学生を派遣することに決定した。(2) 中国・北京・清華大学・生命科学院への学生派遣 (定員 1 名)、及びシンガポール・南洋理工大学への学生派遣 (定員 1 名) について、ほぼ合意に達し、受入側宿泊施設についてさらに協議を進めることになった。(2) については学生企画型の派遣であるため、今後学修の内容の決め方等についてもさらに協議する必要がある。

3. プログラム全体の自己評価 ―成果と課題―

3-1. プログラム目標能力に関する自己評価

平成 28 年度前期において実施された本プログラムの計 9 コースの参加学生を対象に、本プログラムが目標として設定した 3 つの能力、すなわち「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」について、事前学修時と事後学修時に、神戸大学学修支援システム BEEF を利用して、ルーブリック指標に基づき自己評価を行った。参加学生数は 96 人、回答学生数は、事前学修時で 94 人、事後学修時で 80 人であった（平成 29 年 1 月 5 日現在）。各目標能力に関する評価水準については、下記の表 1 の通りであり、自己評価の集計結果は表 2 及び図 1 の通りである。いずれの能力においても、コースへの参加によって向上したことが確認できる。

① チームワーク力

事後学修時において、「運営に関わる段階」（水準 2）と回答した学生が、全回答学生の中では最も多く、3 分の 2 近くを占める。「リーダー役やマネージャー役を果たす段階」（水準 3）にまで達していると回答した学生も、10.0%も存在する。事前学修時に比べて、事後学修時には、「一参加者としての参加」（水準 1）及びそれ以下と回答した学生の割合が 29.2 ポイント減少し、その分、水準 2 以上と回答した学生の割合が増加しており、コースへの参加によって、チームワーク力が高まったことが窺える。

② 自己修正力

事後学修時において、「指摘の意味を理解し自分のものとする段階」（水準 2）及びそれ以上と回答した学生は、全体の 8 割にも達する。特に注目されるのが、事後学修時に「自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階」（水準 3）に達している回答した学生が、事前学修時に比べて、2 倍以上増加していることである。

③ 課題挑戦力

事前学修時において、「与えられた課題の解決に必要な能力を見極める段階」（水準 1）及びそれ以下と回答した学生が、全体の 75%近くであったのに対して、事後学修時には、「挑戦する価値の課題を設定する段階」（水準 2）及びそれ以上と回答した学生が、70%近くも存在する。事前学修に比べて、事後学修において、水準 2 の学生が 23.4%から 46.3%に増大している。特筆されるべきは、「課題を解決するための方略を策定し不断に挑戦し続ける段階」（水準 3）と回答した学生が、事前学修の 3.2%から事後学修時の 22.5%へと 7 倍以上も増大していることである。

表 1 プログラム目標能力とルーブリック指標

	水準 0	水準 1	水準 2	水準 3
チームワーク力	水準 1 に達しない段階	一参加者としての段階	周辺の立場から運営に関わる段階	リーダー役やマネージャー役を果たす段階
自己修正力	水準 1 に達しない段階	他者からの指摘に耳を傾ける段階	指摘の意味を把握し自分のものとする段階	自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階
課題挑戦力	水準 1 に達しない段階	与えられた問題の解決に必要な能力を見極める段階	挑戦する価値のある課題を設定する段階	課題を解決するための方略を策定し不断に挑戦し続ける段階

表2 自己評価結果 ※平成29年1月5日現在

①チームワーク力

	水準0	水準1	水準2	水準3
事前学修	5人 (5.3%)	46人 (48.9%)	42人 (44.7%)	1人 (1.1%)
事後学修	0人 (0.0%)	20人 (25.0%)	52人 (65.0%)	8人 (10.0%)

②自己修正力

	水準0	水準1	水準2	水準3
事前学修	2人 (2.1%)	31人 (33.0%)	50人 (53.2%)	11人 (11.7%)
事後学修	0人 (0.0%)	13人 (16.3%)	43人 (53.8%)	24人 (30.0%)

③課題挑戦力

	水準0	水準1	水準2	水準3
事前学修	5人 (5.3%)	64人 (68.1%)	22人 (23.4%)	3人 (3.2%)
事後学修	0人 (0.0%)	25人 (31.3%)	37人 (46.3%)	18人 (22.5%)

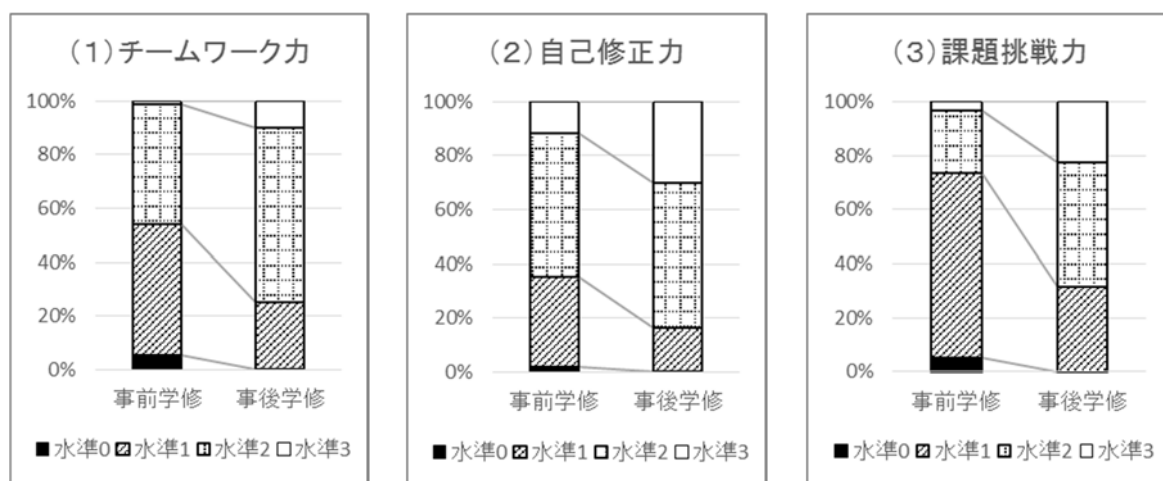


図1 自己評価結果能力別変化

3-2. プログラム参加後のアンケート結果と分析

平成28年度前期において実施された計8コースの参加学生を対象に、コース内容の満足度や学修成果等に関するアンケートを実施した。いずれのコースも既に事後学修を終えていたので、全体報告会においてアンケート用紙を配付・回収する形で行った。今年度後期以降に実施されるコースについては、事後学修期間中または事後学修後に、神戸大学学修支援システムBEEFを利用してアンケートを実施する。

アンケートに回答した学生の内訳は表1の通りであり、各質問（選択式）への回答結果は図1～5の通りである。

表1 回答したコース・所属学部・学年

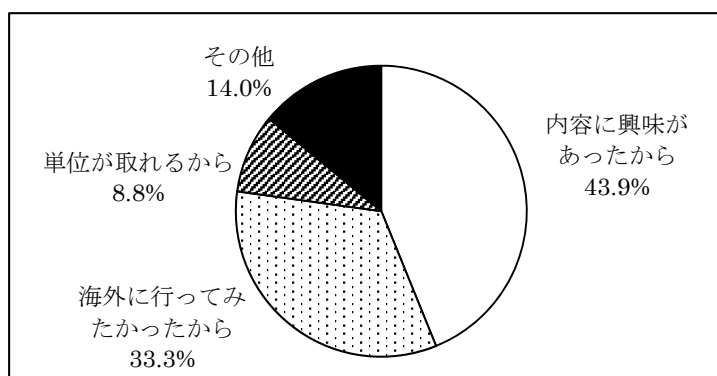
(単位：人)

	国際文化		経営	経済	医	法	農	文	発達	
	1年生	2年生	2年生	2年生	1年生	1年生	1年生	1年生	2年生	
ハプブルク異文化理解	1	1	1	1						4
カナダ・トロントの多文化社会研究	6	9								15
アジア・フィールドワーク					1					1
Lawyering in Asia						2				2
国際産官学連携アドバンスト				1						1
UPLB 農学英語							1			1
インターンシップ チャレンジ (ミャンマー)	1							1		2
ボランティアチャレンジ (ネパール)						1			1	2
	8	10	1	2	1	3	1	1	1	28

(1) コースの参加理由

コースへの参加理由については、「内容に興味があったから」が43.9%、「海外に行ってみたかったから」が33.3%となっており、自由記述からも、本プログラムの趣旨を踏まえて参加していることがわかる。

図1 Q: どのようなきっかけで今回のコースに参加しましたか。(複数回答可)



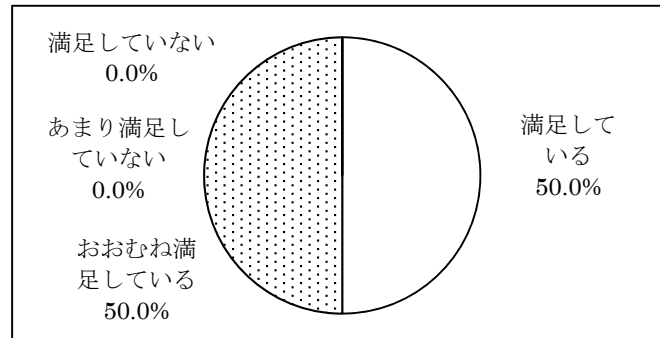
(自由記述欄)

- 英語学習の授業を受けることができるうえ、トロント自体に興味があったので。
- 英語の勉強をしたかったから。
- 元々新興アジアの経済について元々興味があり、実際にベトナムで学んでみたかったため。

(2) 参加したコースへの満足度

参加したコースに「満足している」が50.0%、「おおむね満足している」が50.0%と、コースへの満足度は高い。自由記述からも、各コースでの海外学修活動が、参加学生にとって有益なフィールドワークや国際交流の場となり、また、さらなる学びの動機付けとなっていることが読み取れる。

図2 Q: 参加したコースの内容に満足していますか。



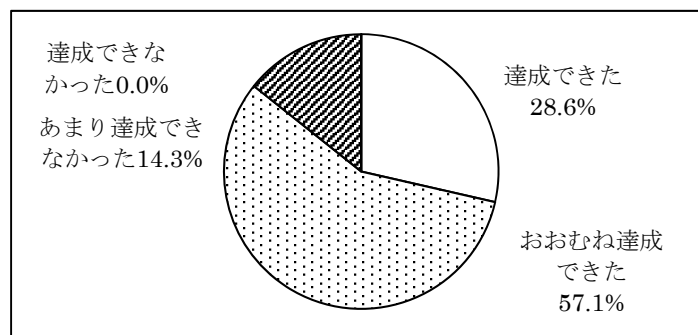
(自由記述)

- フィールドワーク・ボランティアの機会が多かったのがとても良かったです。
- 現地で、ミャンマーの人と話したり交流ができ、企業や大使館など、日本ではなかなか訪問できない所に行くことができたから。初めての海外でとまどうこともありましたが、日本にいても体験できないようなことをたくさん経験することができたため。
- 外国語を、その言葉が使われている国で学ぶという経験は貴重だし、とても充実した期間を過ごせた。
- 英語の学習だけでなく、農のこと、フィリピンのこと、新しい仲間など多くのものを得ることができた。
- フィールドワークの他にボランティアに参加することができ、現地で暮らす一般の人々と接する機会に恵まれていた。
- 長期で海外に行けたことで、よりその地域について知ることができた。

(3) 学修成果

学修成果については、「達成できた」が 28.6%、「おおむね達成できた」が 57.1%と、大半の学生が目標通りの学修成果を得ている。自由記述からも、語学能力の向上に加え、派遣先の日常生活やフィールドワークを通じて、異文化理解を深めていることがわかる。また、十分なコミュニケーションを取れなかったもどかしさを直接体験し、今後の学修意欲に結びつけようとしていることも窺える。

図3 Q: 目標どおりの成果が達成できましたか。



(自由記述)

- ドイツ語を話せるようになること、ハンブルクやドイツ諸地域の歴史と今の様子を、ハンブルクでの生活を通して生で知るという目標が達成できたから。
- 帰国後、TOEFL の点数が上がったため。

- 実際に行ってみると、英語と身振り手振りでしかコミュニケーションを取れない難しさなどを感じた。またいつか行って、さらに成長したいので。
- フィールドワークとして様々な場所にも行くことで、日本との違い、異文化同士の交流を知ることができたため。
- プログラムで得た知識等は今後十分に活かそうです。
- 帰国後の意識が変わったと感じるから。

(4)さらなる留学と今後の学修

本プログラムへの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいとの回答が、「そう思う」61.5%、「どちらかといえばそう思う」30.8%と、9割以上にも及ぶ。関心を持ったテーマについても、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を含め、92.3%の学生がより深く学修したいと回答している。長期留学等の国際的な活動へのチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標が達成されていると言ってよいであろう。

図4 Q：神戸グローバルチャレンジプログラムの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか。

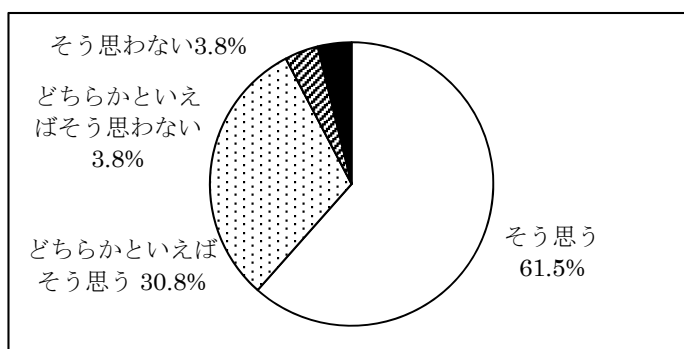
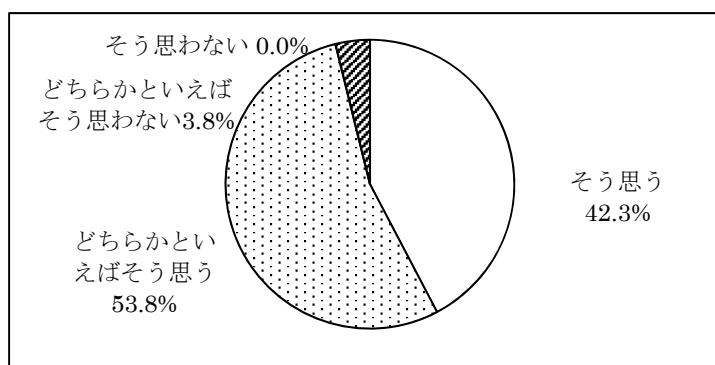


図5 Q：関心を持ったテーマについて、より深く学修したいと思いますか。



3-3. プログラム全体の自己評価総括

(1) 自己評価総括

【自己評価】3：計画通り実施できた

プログラム全体の実施（2-1）、平成28年度に実施した各コースの取組状況（2-2）、ルーブリック指標に基づく参加学生の自己評価（3-1）及びプログラム参加後のアンケート結果（3-2）により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、神戸GCPの目標達成に向けた活動は計画通り進行している。

(2) 今後の課題

神戸大学の教育目標である「自ら地球的課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる」実践型グローバル人材の育成を目指して、本プログラムが今後も継続・発展していくためには、さしあたり以下の3つの課題があげられる。

① 学外活動学修での気づき・経験を次のステップに繋げる取組

本プログラムに参加した学生が、卒業までに「神戸スタンダード」を身につけ課題発見・解決型グローバル人材となるために、学外活動学修で得た気づき・経験を次のステップへと繋げる必要がある。学生のモチベーションを維持していくための取組を企画し、上位学年において学生が国際的なフィールドでの更なる活動へチャレンジするよう繋げていく。その中で、本プログラム未参加学生にも活動成果の影響の輪を広げ、海外プログラムへ参加する意識を醸成する。

② プログラムの認知度向上

本プログラムについては、パンフレットやウェブサイトなどにより周知・広報を行っているが、学生募集の説明会を開催すると既に参加の意思を持っている学生などに出席者が限定されてしまうため、必ずしも学生に対して十分に広く周知できているとは言えない状況である。国際的なフィールドへの興味の有無に関係なく、学生に対して広く情報を発信して本プログラムの認知度を高めていく必要がある。平成29年度の総合教養科目では本プログラムの活動実施国について学ぶ講義を開講し、その中で本プログラムの認知度を上げるとともに、学生の参加を促すこととしている。

③ 経済的支援(参加費用の一部補助)を行うシステム作りの強化

平成28年度実施（派遣）コースについては、海外渡航を行い、経済支援を希望する全ての参加学生に神戸大学基金による経済的支援を行うことができた。今後は、参加者が増加した際も希望者全員に支援を行うため、また、経済的事情を抱える学生も参加できる環境を整えるため、神戸大学基金を中心とした現在の助成金制度に加えて、日本学生支援機構等の各種奨学金を組織的に利用し、経済的支援を強化する仕組みを構築する必要がある。

以上、次年度以降はこれらの課題への取組を通じて参加者数を確保・増加させていくとともに、現在の取組のさらなる充実を図り、本プログラムの発展・目標達成へと繋げていく計画である。